

小林一茶のお正月の俳句に次のようなものがあります・・・。

く <sup>ほうらい</sup>蓬 菜に 南無南無といふ 童かな >

「蓬菜」とは、お正月飾りのことをいいます。子供が、お正月飾りに向かって、仏教の「南無南無」というお唱えをしながら、手を合わせているさまが浮かんできます。

晴れやかなお正月飾りに向かって、仏教のお唱えごとをする子供に、ほほえましい天真爛漫なかわいらしさを一茶が感じている、そんなふうを読むことができる俳句ではないかと思えます。

けれども、お正月の起源をひもといてみるとこの句の子供の姿が、ちがったものに見えてきます。お正月の行事は、六世紀に仏教が伝来した頃にはすでに行われていたようです。とても古くからの行事なのです。

その頃のお正月は、ご先祖様が私たちの家に帰る時期と考えられていたようです。また現在のお盆の時期も、同じくご先祖様が家に帰る時期とされていました。

しかし、仏教の伝来によって、お正月は歳神様が私たちの家にいらっしゃる時期として・・・、またお盆は仏教の盂蘭盆会<sup>うらぼんえ</sup>と結びつき、ご先祖様が家に帰る時期として、いわば役割分担がなされていたようなのです。

そう考えると歳神様が、元日に家にやって来て松の内を過ぎ帰っていくことが、お盆のご先祖様の過ごし方と共通しているように思えます。実際、歳神様をその家を守って下さるご先

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

祖様として祀る地方もあるようです。

私たちのいのちのご先祖様あってのものです。そして歳神様も、私たちのいのちを守って下さいます。どちらも、私たちを生かしているものです。それも共通しているところかもしれません。

さて、一茶の俳句に描かれた子供の姿を、改めて考えてみましょう。お正月飾りは歳神様をお迎えする飾りです。その飾りは、お正月の起源を考えると、ご先祖様をお迎えするものでもある、といえるのではないのでしょうか。

そうすると、子供がお正月飾りに南無南無とお唱えする姿は、自分のいのちの源であるご先祖様にお唱えをする姿に見えてきます。そこには、深い祈りの姿があるように思えてきませんか。

お正月は一年の無事を願う時です。そして、ご先祖様に感謝の思いを伝える時でもあるのだと思います。

一茶の俳句の子供のように・・・。

— 終 —